

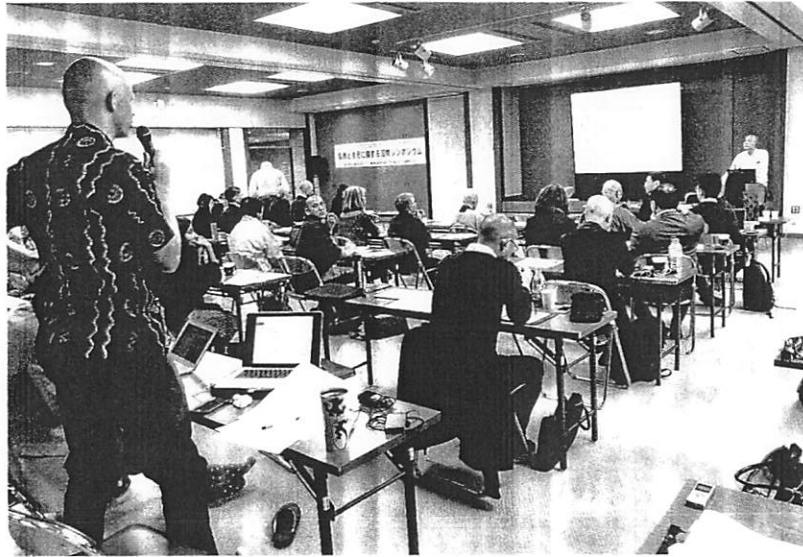
# こころの風景

## 僧侶が自殺予防と遺族支援

### 孤立する心の居場所に

死にたい思いを抱える人が安心して相談できる場所や相手として、寺や僧侶をもっと活用できないか。欧米やアジアなど国内外の仏教関係者が集まった「仏教と自死に関する国際シンポジウム」。孝道教団・国際仏教交流センターや浄土真宗本願寺派総合研究所などが主催、11月に関東と関西で5日間にわたり自殺予

僧侶による自殺対策 自殺問題に積極的に関わる僧侶は10年ほど前から増え、手紙や電話での相談を含めたさまざまな活動を行っている。遺族の集いや追悼法要も各地で営まれるようになった。「自死・自殺に向き合う僧侶の会」のように超宗派の僧侶による活動も盛んだが、各教団も「自死に向き合う」といった冊子の発行、研修会の開催など、自殺対策に関心を寄せるようになっていく。



国内外から仏教関係者が集まった「仏教と自死に関する国際シンポジウム」。活発な質疑応答が行われた=11月6日、横浜市神奈川区

防と遺族支援の実践例を共有、意見を交換した。初日は、日本の仏教教団や宗派を超えた僧侶らによる取り組みが主に紹介された。苦悩を抱える人々のための相談窓口、自殺者の供養や追悼法要、遺族ケアなどで、それぞれの特徴を生かしながら活動を展開している。共通するのは、相手を傷つけずに気持ちを受け止めて対応することに細心の注意を払う点。曹洞宗総合研究センター専任研究員の宇野全智さんは、かかりつけ医師のような「かかりつけ寺院」を提案、寺院を自殺対策の最前線として捉え直すように問題提起した。

浄土宗僧侶で宗教学者の小川有閑さんは、超宗派で構成する「自死・自殺に向き合う僧侶の会」のメンバー。会の

特徴は、孤立する相談者に直筆で書く手紙だ。直筆にぬくもりを感じ、お守りのように持ち歩く相談者もいる。10年間で手紙は8千通を超えた。手紙では死にたいという相手の気持ちを否定しない。「引っぱり上げるのではなく、自分の力で立ち上がって歩いてもらうためのお手伝いを心掛けていく」

自殺予防に取り組む仏教関係者は遺族支援にも力を入れる。ただ、社会的偏見にさらされがちな遺族と接する中、僧侶が追い打ちを掛けている例も知る。「自殺したら成仏しない」。教義にない言葉や投げ掛けられ、傷つく人々。「自死は一つの死の在り方。成仏しないということはない」。サポート活動に携わる僧侶は言葉に力を入れる。

「自死遺族は『沈黙の悲しみ』の中にある」と小川さんは言う。大切な人の死について語れない苦しみ。満足いく葬儀が出せず、死因も人に話せず、自責の念も抱える。だからこそ、支援の僧侶たちは「安心して」なくなった人へ「安心して」追悼法要を営み、遺族に寄り添う活動を続ける。

自殺対策白書によると、2016年の自殺者数は2万1897人。特に若年層の死因の1位で、対策は急務だろう。こうした状況の中、工夫を凝らした活動で注目を集めるの

電話相談は金、土曜の夜から早朝まで。「孤独の中、心が張り裂ける思いで、いっぱい、いっぱいになっている」。電話の向こうの人をそんぷうにイメージし、竹本さんは受話器を上げる。(共同通信記者 西出勇志)

今回の「こころの風景」は来年1月30日掲載予定です。

### 作家玉岡かおるさんが小説

に、19世紀の日本に生きた女性に関わっていたことを知り、執筆

った。楽しんで読んでいただければうれしい」  
みやびは幕末の混乱期を生き抜き、明治期に夫が亡くなった後は海外との貿易に目を付けて、工芸品を生み出す過程で、現場で働く女性の姿も生き生きと見えてくる。

「明治という激動の時代に、強い女性がいたことを知ってもらいたかった」と話すのは、小説「花になるらん 明治おんな繁盛記」を出版した作家の玉岡かおるさん。百貨店「高島屋」の礎を築いた飯田歌をモデル

### 本売り込みの人生描く



「ティの手本だ」  
アンを日ます  
です